

国立国語研究所学術情報リポジトリ

会話スタイルとラポート： 日英・若い女性の座談例から

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-03-31 キーワード (Ja): キーワード (En): rapport, conversational style, Japanese, English, Singapore 作成者: 佐々木, 優子, SASAKI, Michiko メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001149

会話スタイルとラポート

—日英・若い女性の座談例から—

佐々木 優子

SASAKI Michiko: Conversational Style and Rapport;
English/Japanese Conversation between Young Women

要旨：本稿は、東京、シンガポール、ロンドンの3カ所で持たれた、若い女性による座談を手がかりに、文化的背景が異なる場合の会話スタイルとラポートとの関係を探るものである。各座談で、ラポートを表示し、その発生・維持・増強にもっとも影響したと思われる要素は、以下の通りであった。

- (1) 東京座談－個人的体験への言及、
- (2) シンガポール座談－笑い声、
- (3) ロンドン座談－重なり発話。

なお、重なり発話に妨害的中断が見られないことは全グループに共通していた。さらに、あいづちに関しては、日本座談が一番頻度が高いが、どのグループでも多く見られ、ラポート要因となっていた。

そして、今回のラポート表示形態を決定した第一の要素は、与えられた話題に関する背景知識の差であると感じられた。さらに、言語・文化を超えて、座談が互いのサポートによって成り立つ様子が認められた。

キーワード：ラポート、会話スタイル、日本語、英語、シンガポール

Abstract: This paper explores the relationship between conversational style and rapport using three conversations among young women held in Tokyo, Singapore and London. The most significant features which seemed to have created, maintained or increased rapport were the following;

- (1) disclosing personal experiences in the Tokyo conversation,
- (2) laughter in the Singaporian conversation,
- (3) overlapping utterances in the London conversation.

Also, *aizuchi* (back-channel behavior) which creates rapport was common in every conversation.

The biggest element which decided the form of rapport was the amount of participants' background knowledge on the given topic. Moreover, all conversations showed supportive style regardless of their background culture.

Key words; rapport, conversational style, Japanese, English, Singapore

はじめに

言語の機能は、時に二分法で論じられる。Brown & Yule (1983 : 1) は、transactional(内容表現)とinteractional (社会的関係および態度の表現) の二大別を用いている。他の機能を取りあげて項目として立てることも当然可能であるが、上記の 2 つが言語の主要機能である点は疑う余地がないと思われる。特に対面コミュニケーションにおける言語運用は、比重の差こそあれ、両機能に関わるものである。内容表現のみが会話の参加者の頭にあって態度の表現は意図されなくとも、後者は露呈せざるを得ないわけであるし、逆に内容は意味を持たず人間関係の確立が唯一の目的であったとしても、そこにはなんらかの意味内容が存在してしまう。そして対面コミュニケーションの理想は、内容表現が十分なされると同時に、態度の表現も過不足なくなされ、参加者間の好意的人間関係の確立に成功するものであろう。好意的人間関係の確立とは、言い替えれば、参加者間にラポートが生じることである。その重要性は医師と患者、教師と学習者、会社の同僚同士、店の主人と客などの間のコミュニケーションを考えてみれば、うなづけよう。

Goffman (1976) は ritual constraints を、Leech (1983) は phatic maximを、Brown & Levinson (1978, 1987) は positive politenessを論じたが、どの文化・言語においても、コミュニケーションの成否と人間関係との間にはかなり密接な関係が存在する。Hillほか (1986) にあるように「ポライトネスの目的は、相手の感情を思いやり、互いに居心地の良い関係を確立し、ラポートを生み、強めること」(p. 349) にある。そこで本稿では、語用論的なルール、社会言語学的なルールを論じる前に、いわば根源に立ち戻って、コミュニケーションの中のラポートの姿の一端をとらえることを目的とする。

ラポートとは、人間同士の間に生じる「波長が合う、共感が持てる、信頼感が持てる、暖かさを感じ合う」といった感情である。それは、さまざまな形・強さをとり、軽い一時的なものもあれば、人の一生に渡るものもある。コミュニケーションをスムーズに行いたいと願う場合、人は（意識するしな

いにかかわらず）ラポートができるだけ早く生じるような言語行動をとる。例えば公的場面の場合、アメリカ人講演者は冒頭にまず冗談を言って聴衆を笑わせてから本題に入り、日本人講演者は自分が壇上に立つにはまだまだ研鑽が必要だといった態度を示してから本題に入るという説がある。このパターンが現在でも一般的かどうかは別として、これがラポートのきっかけを作ろうとする話し手の試みであることは間違いない。また、小規模の座談の場合も同様で、日本人ビジネスマンが商談に入る前に、天気や家族の話などの世間話に時を割くというのも、ラポートのきっかけへの努力である。ところが、Tannen (1990 : 77) によると、アメリカ人男性は内容交換重視の会話スタイル (report talk) を好むという。逆に、アメリカ人女性は人間関係重視の会話スタイル (rapport talk) を持つとする。もしアメリカ人ビジネスマンの会話スタイルが、商談の場合にはまず本題に入り、実質的交渉を積み重ねる中で、会話のテンポや価値観の一致を見いだし、そこでお互いの間にラポートが生じ、冗談も出始め、さらに強いラポートを生み出すというパターンを持っているとしたら、日本人ビジネスマンの「商談の前の世間話」はラポート発生に結びつかないどころか逆効果となるのではないか。Wetzel (1990) には、米国の女性と男性の会話スタイルの差異の説明が、日本人とアメリカ人の会話スタイルの差異の説明に対応する例があげられている。つまり、あいづち、調和型対主張型、沈黙などを取りあげると、日本人の特徴とされる点が、米国女性の特徴とされる点と一致するのである。会話スタイルの文化差とラポートとの関係は、研究されるべき部分を多く持つようである。

そこで本稿では、ラポート重視の話し方をするとされる女性の側に対象をしづらり、異なる文化的背景を持つ 3 グループの座談会を手がかりに、次の 2 点について考えてみたい。

- (1) 若い女性の座談場面において、ラポートはどのように表示されるのか。
- (2) そこには文化間で類似および差異があるか。

なお、ラポートのもととなった英語 *rapport* の発音であるが、筆者の個人的

好みを言えば、発音はラポーラに近い。精神医学では「ラポール」を用いているようである。ただ、最近の語学関係の分野では「ラポート」で定着しつつあるとも思われるため、これを採用する。¹⁾

1. 研究方法

1.1. 資料

今回の資料は3つの座談会からなる。日本、シンガポール、イギリスの3カ所で1991年12月に録音・録画（一部は録画なし）したものである。参加者は全員が、ある国際的な日本企業の研修生という身分である。研修が始まったばかりでお互いの背景に関する知識は限られている。近い将来、同じ職種につき、グループ内同士、そして他のグループの人々とも同僚として接触する可能性を持っている。全員が女性で、年齢は20代（大半が前半）である。それぞれの国の同年代の女性の中で、平均以上の教育・教養を有すると考えてよい集団と言える。

- (1) 東京組－日本人5人による日本語の座談会
- (2) シンガポール組－中国系シンガポール人6人による英語の座談会
- (3) ロンドン組－イギリス人4人とアイルランド人1人による英語の座談会

1.2. 資料収集

参加者へはまず、日本語または英語の文書で座談会協力を依頼したが、そこでは、(1)司会者を設けず気楽に話し合ってほしいこと、(2)話題はこちらから簡単に提示するが、それにこだわらず自由に話し合ってもらいたいこと、(3)座談は記録するが、あくまでも語学の観点から行う調査で、個人のキャリアとは一切関係を持たないことを説明した。結局、どのグループもこちらが提示した、話題に関する説明を前に置いて、話し合いを持った。以下は英文説明文の日本語訳（【】内は日本人用日本語版）である。

○以下の話題について、気楽に雑談の気持ちで話し合ってください。30分程度で切り上げてください。

(1) これまでの日本人【外国人ー特に英語話者ー】との接触体験・コミュニケーション体験

(2) これまでの日本語【英語】学習歴

(3) 今回の語学研修にのぞむこと（教授法・教材・授業時間数・到達目標等）

(4) 日本【外国ー特に英語圏ー】へ行った時、余暇にしたいこと

○では、お茶を飲みながら、自由に話し合ってください。

座談会では、内容重視になりやすい、つまり、ラポートが生じにくいとされる条件と、逆に生じやすいとされる条件とを組み合わせることを意図した。

まず、生じにくい雰囲気になりそうな要因として、以下があげられる。

- ・4つの話題（かなり堅いものもある）が、例としてあげられている。

- ・話し合いの場所が教室である。

- ・ビデオカメラが遠くに設定されている。（一部座談なし）

- ・机の中央にはカセットテープレコーダが置かれている。

逆に生じやすい雰囲気になりそうな要因としては、次があると思われる。

- ・仲間同士、同年輩の女性同士の話し合いで、他の人間は介入もしないし、傍聴もしていない。

- ・依頼には「気楽に、自由に」といった言葉がくりかえし出てくる。（英語版でもその点に注意し、終始discussionではなくchatという言葉を用いた。）

- ・その日の語学授業が終了した直後でありほっとした気持ちがある。

- ・茶菓子が供されている。

1. 3. 分析対象と文字化の原則

各座談会（東京2、ロンドン3、シンガポール2）のうちから、録音状態の比較的良いものを各地域ひとつずつ選んだ。そして、母語話者2人ずつに

聞いてもらい、ラポートが十分生じているとの感想を得た。正味、東京組27分、シンガポール組23分、ロンドン組13分の座談会である。その中で、特に、会話スタイルの対照部分は、座談開始2分経過後の最初の談話²⁾から10分間をあてた。この10分間は一応の会話スタイルが確立され、維持されていると感じられた部分である。

資料は文字化を行ったが、その原則は以下の通りである。

- (1) 言語音に加えて、非言語音（笑い声等）を〈 〉内に記す。³⁾
- (2) 発話文の認定は韻律・統語・意味から判断する。一人の参加者のひとまとまりの音声言語連続を一発話文とする。あいづちは別に扱う。発話文の終わりには音調を示す記号をつける。「。」または「.」は下降調、「？」は上昇調、「・・・」は継続調、「！」は特別な強調を示す。各発話文の終わりには行替えをする。
- (3) あいづちは{ }に入れて示す。
- (4) 複数による同一発話は、発話者欄に「複」または「plu.」と示す。
- (5) 重なり発話は、重なりの始まりに<*>または<**>などを付け、位置をそろえて書き始める。
- (6) 不明箇所は(?)で示す。
- (7) 1発話文内、あるいは発話文と次の発話文（または、あいづち）との間に、認識できるだけの沈黙がある時は、秒数を〈 〉に入れて示す。⁴⁾
「〈 〉」は認識はされるが、秒数を数えるほどもない沈黙を示す。

なお、資料中の、個人あるいは組織を特定できる名詞はすべて除いた。

1.4. 分析項目

1.4.1. ラポートの表示

ラポートは主観的な感情であり、会話の参加者同士の間でも、その表示と受容の間にギャップが生じやすい。まして、第三者がその全貌を的確にとらえることはむずかしい。しかし、例えば、会話の参加者AがBに対してほほえみかけ、Bがそれに応えてほほえみ返すことによりラポートが生じはじめ、それがさらに挨拶のことば、実質的なやりとりに進む中で、好意的感情の表

示と受容が互いに繰り返され、より強いラポートが生じていくといった経過は、容易に想像できる。ラポートは、会話のテンポ・音調といった音声面から、非言語伝達は無論のこと、話題・内容までのあらゆる対人関係の側面の、一方所あるいは数カ所において、重なり合う・呼応し合うという形で表示される。その過程は、第三者によって観察できる部分も多く含むと言えよう。今回の資料でも、話題、笑い、ターンなどが直ちにラポートの表示項目として浮かびあがった。そこで、まず、それらに関連した先行研究にあたり、ラポートに関する5つの仮説を立てた。

1.4.2. 先行研究に基づく仮説 (その1) 話題と笑い

最初に英語の会話における話題について考えてみたい。Landisの報告は1927年のものであるが、ロンドンの街角で道行く人々の会話の話題についての統計をとり、次の結果を得た(Thorne & Henley 1975: 266-267)。男性対男性の会話の話題は、(1) ビジネスと金銭(35%)、(2) 娯楽・スポーツ(16%)、(3) 他の男性について(15%)の順序であった。これに対して、女性対女性の会話の話題は、(1) 他の女性について(26%)、(2) 自分達について(20%)の順であった。Mooreがニューヨークで行った1922年の報告でも、男性の話題はLandisの報告と順序が同じであるが、女性の話題は(1) 男性について(44%)、(2) 被服について(23%)、(3) 他の女性について(16%)となっている。この両調査から、女性の方が自分と周りの人を話題にすると言えそうであるが、この時代に仕事を持った女性の占める割合が現代とは異なることは考慮されなければならない。ただ、Tannen(1989, 1990)は、現代の米国女性の会話の特徴として、冗談を言わないこと、こまごまとした日常生活の話題や個人的領域の話題を好むことを述べている。

次に笑いに関して、Duncan & Fiske(1977: 79)の5分間ずつの対話の分析によると、参加者は平均2.5回笑い声を発したが、女性は相手の性別にかかわらず、男性よりも明らかに多く笑い声を発したという。Coser(1960)によると、男女両方が出席する職場の会合での調査結果は、「ユー

モアのある女性とは男性の言う冗談に適切な笑い声を出す人であり、ユーモアのある男性とはおもしろい冗談が言える人である」という文化的期待に沿うものだったという (Thorne & Henley 1975 : 252)。メイナード (1987 : 88-89) では日米の大学生によるインフォーマルな会話が対照され、総計60分（3分×20組）間の中で、笑いに関しては、日本93回、アメリカ64回という数字を得ている。

今回の座談の参加者は若い女性に限られている。話題・形式は特に改まったものではないが、親しい友人同士のとりとめのないおしゃべりではない。話題は枠が設定されており、それは個人的体験と個人的希望を問うものではあるが、プライバシーの領域に踏み込まなければ話し合えないほどのものではない。先行研究はアメリカ人の会話に関するものが多く、イギリスとシンガポールではまったく文化が異なる。従って、英語座談としてひとつにくくすることは不可能であるが、一応、以上から次の仮説を立てた。

仮説（1）英語座談の話題は日本語座談の話題に比べて個人的体験に踏み込むものが多く、それがラポートをより強める。

仮説（2）英語座談、日本語座談ともに笑い声は聞かれるが、日本語の方がやや笑い声が多く発生し、ラポートを表示すると共にさらに強める働きをする。

1.4.3. 先行研究に基づく仮説（その2）ターン等

発話の重なりに関して、レヴィンソン (1990 : 369) は Ervin-Tripp の報告を引用し、英語の発話全体の中での重複は 5 % 以下（5 % よりかなり少ないことが多い）とする。さらに、話者交替は秩序正しく、正確なタイミングで、ほとんど重複なしに、さまざまな環境でなされるということが指摘されている。しかし、重複を見る時、話者の性差、人間関係（特に上下関係）、親疎の差、会話の改まり方などを無視することはできない。Zimmerman & West (1975) は、重なり発話を「意図せずに起こる重複」と「妨害的中断」⁵⁾ に分け、さらに話者の力関係と重ね合わせて分析している。Tannen (1984) では、友人同士のインフォーマルな会話が分析されているが、そこ

には発話の重なりを積極的にとらえる「high involvement」タイプと消極的にとらえる「high considerateness」タイプの2つの会話スタイルが存在するとされる。

Hayashi (1988) は、日米4人ずつの30代、40代の男女混合の参加者からなる4つの座談会を分析して、以下の結果を得ている。日米のインフォーマルな会話でもっとも対照的な点は、日本人のインターラクションにおける重なり発話の多さである。しかも、重なり発話が時に3人、4人の参加者を持つ。(p. 280) アメリカ人参加者は「one speaker at a time」(発話者は一人ずつ)のルールをより意識した会話スタイルを持つ。米語では重なり発話は交渉と競争になりがちで、日本語ではアンサンブルのための共時会話となる。(p. 283) 言い替えれば、日本人は相手のターン保持(Hayashiではfloor management)を助けることでなごやかな会話を楽しむといった目的のために重なり発話をする。一方、アメリカ人の重なり発話はターンをとろうとする中で生じる(p. 286)。同様に、LoCastro (1990) も、Ikuta, Hindsの例もひきつつ、日本語の重なり発話の多さを指摘する(pp. 294-296)。

あいづちに関して、メイナード (1987) の報告では、60分中のあいづちの総数が日本871に対しアメリカ428と、日本が2倍以上という回数になっている。LoCastro (1990) でも、外国人が日本化するにつれて、あいづちの頻度が増すこと(p. 156)，女性ばかりの参加者による日本と米国のインフォーマルな座談では、日本人の方があいづちが多いことは疑う余地がないと思われることが述べられている(p. 170)。

ザトラウスキー (1993: 161) は、日米の電話による勧誘の会話を分析し、以下を指摘する。

——英語の会話にも（中略），二人の参加者が協力して作り上げる単位もあることはあるが、日本語に比べると、やはり少ないようである。英語の場合は、「相づち的な発話」によってあまり遮られることがないため、一人の参加者が複数の発話を続けて説明を重ねることができるが、日本語の会話の場

合は、情報提供者も協力者も「実質的な発話」と「相づち的な発話」の両方を用いつつ、協力し合って話段を作り上げる。――

ただし、アメリカ女性のインフォーマルな会話に関しては、インターラクションの量が多く、人間関係重視であり、ターン (floor) を得ることより、みなのが参加を得続けることが重要視されるといった報告も多く見られる。

(Martz & Borker 1982 : 209など)

水谷 (1983 : 43) はあいづちとターン保持に関連して以下を指摘する。
――あいづちの多い話しかた、時には相手の文を完成し合うような話しかたは、かなり日本的なものようである。英語国民の場合など、人によって、相手の文がおわらないうちに、あいづちを打つことはあるが、一般にその回数はずっと少ない。時には、相手の話がすっかりおわるまで、数分間も、じっと無言で聞いていることもある。――

さらに、水谷 (1983 : 44) は続けて以下を指摘する。
――日本語と外国语という言語の違いだけで割り切るべきものではない。また、親しい者同士と遠慮のある者同士という人間関係だけでも分けられない。話題による区別もある程度可能であるが、それがすべてではない。（中略）肝心なのは、話し手と聞き手が、その場において、どういう話しかた・聞きかたを選ぶかという、目的性あるいは価値観による違いである。――

米語は今回の対象ではないわけだが、これらの先行研究に基づき、以下の仮説を立てた。

仮説（3）日本語座談では英語座談よりも話者交替がひんぱんに行われ、重なりも多い。ただし、重なり發話に妨害的中断はほとんど見られず、参加者が「共話」（水谷1983 : 43）の形で共同して發話を作り上げ、ラポートが表示される。

仮説（4）英語座談では、話者交替がスムーズな間隔で進む。重なりがあり起こらない中で、意見交換が十分なされる。發話の重なりではなく、意見の積み重ね、語彙の重なりにラポートが表示される。

仮説（5）日本語座談では英語座談よりもあいづちが多く、それが、話し

手の発話継続を促すと共に、ラポートの表示ともなる。

2. 分析

以下、仮説で取りあげた項目に従って分析を試みる。

2.1. 話題

話題に関する背景知識の差がはっきりと話題の展開に現れている。

2.1.1. 東京組の話題

東京組では、「じゃ、順番にやっていきますか」「じゃあ、これまで外国人の人と接する機会多いんじゃないかなと思いますけど、なんか体験談があつたら話しましょうとか言うと固くなっちゃうから」といった手順に関する発話があったあと、本題に入っていく。まず、外国人とのコミュニケーション体験が取りあげられ、「（外国語では）日本人同士のこういう他愛ない会話っていうのが出来ないんだよね」といった発話に続く。2分間以内に「他愛ない会話」の調子で各話題について話し合うという意識が参加者の間に出てきたことがうかがわれる。最初の話題である「外国人との接触体験・コミュニケーション体験」に関連して、海外で生活した時の経験がひとりずつ披露される。そこではイギリス、シンガポール、アメリカ、スペイン、オーストラリアでの経験を各自が持ち、それをこだわりなく披露する様子がうかがわれる。次の「英語学習歴」の話題に関しては、幼児期に5カ国語の学習体験を持つBが、他の参加者の関心を集め、ターンを長く保持する。その後各自が体験に根ざした語学学習観を披露する。ロールプレイの利点、単なる英会話以上の運用能力を身につけたい希望、現在の教師のクラスコントロールの良さ、状況作りのうまさの指摘、大学の英語授業やテレビ・ラジオ英会話授業の問題点等、他の参加者の賛同を得つつ、各自の発話が流れるように続く。外国人とのコミュニケーションにあたっての積極性の必要、幼児の言語習得過程との比較、外国語運用能力の持続のむずかしさ、ラジオのバイリンガル放送、地域の外国人居住者、大学の外国人留学生の日本語運用、高校での英語学習体験も話題にのぼる。最初の3つの話題で時間いっぱいとなり、4番

目の「外国へ行った時、余暇にしたいこと」を話し合う時間はなくなる。

話題に関する東京組の特徴は以下の通りである。

- (1) 個人的体験への言及部分が大きい。
- (2) 各人が豊富な体験に根ざした意見を持ち、それを臆せず披露する姿勢が見られる。

2.1.2. シンガポール組の話題

シンガポール組では大半の参加者がなんらかの日本語学習体験を持つ。座談は各自が自分の学習体験をごく手短かに述べるうちに最初の2分間が過ぎる。「今回の語学研修にのぞむこと」という話題について、カセット・テープの必要性、進度、音楽テープの有用性、絵教材、授業時間数、到達目標が次々と話題になる。かなりの時間が費やされたのが、「日本へ行った時、余暇にしたいこと」についてである。ディズニーランド、原宿、ホーム・ビジット、お寺、新幹線、富士山、ジュリアナ、夏祭り、桜、気候の寒さと、話題はめまぐるしく変わる。最後に「日本人とのコミュニケーション体験」に移り、日本人の英語の特徴、日本人旅行客のマナーの良さ、若い世代、将来の日本人同僚との関係などが話し合われる。

話題に関するシンガポール組の特徴は以下の通りである。

各自がごく短く情報提供を行う形が多いが、出される情報は具体的で何らかの背景知識があることをうかがわせる。

なお、シンガポールでは周知のように、英語は公用語であり母語ではない。参加者達は中国語を母語として話すだけではなく漢字も書けるが、学校教育は英語を受けたという。日常生活では複数の言語を使っており、参加者同士が英語で話しあうことへの違和感は見られなかった。話された英語はシンガポール英語の持つ独自性を示している。座談会の中では2ヵ所中国語の単語が出てきた。

2.1.3. ロンドン組の話題

まず最初の「日本人との接触体験・コミュニケーション体験」から入るが、それについてはほとんど誰も話すほどの経験を持たない。BBCのTV番組で

日本が出てきたのを見た程度である。2番目の「これまでの日本語学習歴」に関してもゼロに等しい。日本人とは「グループ行動をとることの多い、統率のとれた、マナーのいい人達」程度のコメントで、最初の2分間のうちに、ふたつの話題をカバーしてしまう。

3番目の「今回の語学研修にのぞむこと」で出た話題は、シンガポール組とかなり重なる。異なる点は、一齊に声を合わせて繰りかえすタイプの練習の持つ問題点、すべての和文に英訳がほしい、表記の学習が必要か否か、などが話し合われたことである。そして、4番目の「日本へ行った時、余暇にしたいこと」の話題に移る。日本の食べ物、買い物、ホーム・ビジット、神社、旅行などが話題にのぼるが、具体的な知識が非常に限られている点がシンガポール組と対照的である。参加者全員の関心が集中したのは、5年間のうちに日本語が出来るようになりたいという目標について語った時であった。

話題に関するロンドン組の特徴は以下の通りである。

全体として情報量が少なく、それが座談全体の時間の短さにもつながっている。背景知識が限られており、あるテレビ番組と今回の研修以外には具体的情報がない。従って漠然とした一般論の枠に留まりがちである。また、傑出した背景知識の持ち主がないために、参加者間のインフォメーション・ギャップは大きくない。従って、皆で口々に話し、共感しあい、一挙に座談を運ぶ傾向が見える。

2.1.4. 話題とラポート（1）

話題の分析は様々な角度から行われ得るが、ここでは特に個人的体験の分かち合いの観点を取りあげたい。3グループの話題を対照すると、個人的体験への言及に顕著な差が見られる。言及量は「東京組一大、シンガポール組一中、ロンドン組一小」となるが、特に、以下の東京組の例では、不愉快な体験を他の参加者と分かち合う話し手の姿勢が、一挙に強いラポートを生み出している。

A 1 : あのー、イギリスの英語、英会話学校ですごい悲しいことがあってー。

〈0.4〉

A 2 : あの一回めー、学校変わったのね、合わなくて。

{D : シー}

A 3 : そのあとで、どうしても夏だったからー、なんて言うのかなー、バケーション気分っていうか、そういう人が多かったの。

{複 : シー}

A 4 : でも私はー〈-中略-〉、〈〉すごいいまじめにやりたかったのね。

{複 : シー}

{? : シー}

A 5 : でもクラスの雰囲気がそうじゃなくって、先生もわりとそれでなあああだったから〈0.2〉言いに行ったの。

{複 : シー}

A 6 : でもそんなにうまく、話せないし、〈〉きっとイギリスって、なんて

{複 : シー}

言うの、丁寧さとかー、その、すごく、なんて言うの、大切にする国だからと思うんだけど、おまえみたいにね、馬鹿でね、なんか、礼儀作法を知らなくって、あのー、なんて言うの、最低な生徒を見たのは初めてだとかっていうふうに〈*〉言われて・・・

{D : 〈*〉えっ、言われて？}

{複 : 〈**〉言われてー！}

{B : 〈**〉ひどーい！}

最後の部分でAの「言われて」に即座にDが反応し、それが残り全員の共感を呼び起こし、一気にラポートを生み出している。

2.1.5. 話題とラポート（2）

無論、不愉快な個人的体験がすべて同情からラポートへという過程をとるわけではない。次の例では困った体験がおかしさの笑いにつながっている。

D 1 : 〈*〉私もスペインに行ったときに、英語がぜんぜん通じなくってー〈〉なんか、こう、バルに入ったんだけど、どこで食べていいかわかんな

{複 : シー}

- {複 : シー} ンー}
- (D) くって、「ここで食べていい」って一応英語では聞いたんだけどー、
- {複 : シー} ンー}
- {複 : シー} ンー}
- (D) それでみんな怒った顔してー、バタバタやってるしー
- {C : <小さな笑い声>} ンー}
- (D) そこでなんかひとりー、おじ、おじさんがなんか <-後略->

Cの小さな笑い声は「バタバタやってる」におかしさを感じたものであろう。この場合前者とは異なり、ラポートはほとんど表示されていないと感じられる。ロンドン組の座談からは話すほどの個人的体験がないことがうかがわれ、シンガポール組には言及が多少あるが、東京組の（2）の例同様、軽い笑い声につながるものが多い。個人的体験への言及とラポートとの間に強い関係が見られるのは、東京組だけである。

2.2. 笑い声

笑い声に関しては以下の現象が見られた。

東京組の音調は暖かくやわらかいが、笑い声は10分間にわずか3回である。ただし、ビデオの画面から見られる参加者の表情は終始おだやかな笑みを見せてている。ロンドン組は東京組に近い。笑い声は10分間に6回のみである。ビデオで見る表情はおだやかではあるが、笑みはあまり見られない。

これと対照的なのがシンガポール組である。笑い声の発生回数は10分間で43回と群を抜いて多い。Jefferson (1984) (1985) では、英語における心配や悩みを示唆する目的の笑い、下品な笑い、発音をゆがめる笑いが分析されているが、今回の資料ではそれらは限られている。資料中の笑い声は3大別できる。

2.2.1. おかしさの笑い (1)

冗談、あるいは話者がまじめに言ったことが、他の参加者におかしい気持ちを起こさせる。反応としてのおかしさの笑いは、ラポート表示であり、より強いラポートへとつながっていく。

以下はシンガポール組で、全員がどっと笑った例である。

C 1 : 〈説明の紙を読みながら〉 What would you like to do during your free time in Japan.

(〈歌うような調子で紙を読む〉 ニホーンへ行った時、余暇にしたいことはなんですか。)

plu. : 〈*〉 Disneyland! (ディズニーランドよ!)

{plu. : 〈*〉 〈どっと笑う声〉 〈拍手〉 }

{C 2 : 〈笑いながら〉 Oh, I see.} (わかったわ。)

全員が一斉にどっと笑った場合、一気に強いラポートが生み出されることを感じさせる。

2.2.2. おかしさの笑い (2)

東京組のおかしさの笑い2例のうちのひとつは、前項で紹介したスペインのバルの談話であり、もうひとつはその直前の部分である。

B 1 : で、そういう人たちとしゃべる時に使うのは英語なんだけどー、 〈〉 シー}

{複 : オーストラリアとかさ、イギリスとか、アメリカとかっていう英語がネイティブの国の人だったら、 〈〉 こっちが単語を並べるだけでも、 〈〉 シー}

{? : アアア}

(B) わかってくれるんだけど、それを〈0.5〉 ドイツ人とかーフランス人とかー、

{複 : シーン}

(B) : 〈*〉 あと 〈1.4〉 シーあとなのに、あのスペインとかー

{D : 〈*〉 フランス人特にわかんないよねー〉 〈Cに向かって小さな声で〉

{C : 〈笑い声〉 }

(B) 南米 〈0.6〉 の方 〈**〉 の人とかー・・・

D 1 : 〈**〉 私もスペインに行ったときに、英語がぜんっ

(D) ぜん通じなくってー、なんか、こう、バルに入ったんだけど、 〈後略〉

Dの発話にCが反応して笑っているが、Bは「ンー」と受けたあと、そのまま話し続けている。D C間の弱いラポートが表示されているだけである。また、Cの笑いにはおかしさの笑いとともに、次の2.2.3.の要素も感じられる。

2.2.3. 好意的笑い

話者に対する支持や好意を表す笑い。これはひとりの話者の話に好意的に幕を引く、つまり、ターン交替の役を第一の機能とする。

以下はシンガポールの例である。

C 1 : So we must learn Japanese very well before going there, otherwise we can not <*> (?)

(だから行くまでに日本語をしっかり覚えないと（以後聞き取り不可）)

A 1 : <*> Bring a dictionary, ah? (辞書を持っていけば?)

? D : <*> Yeah, bring a dictionary.

(そうね、辞書を持って)

{plu. : <laugh>} (笑い声)

A 2 : The other. (ほかに)

笑い声によってひとつの談話に区切りがつき、Aがイニシャティブをとって次の話題に移っていく様子が見られる。この笑い声は弱いラポート表示と受け取ることができる。

2.2.4. ひそかな笑い（1）自嘲

これは、自嘲の笑い・恥ずかしさの笑いなど、通常低い音で発される、おかしさ・うれしさの感情を含まないものを指す。さらに、話者の発話の直後に続く、話者ひとりによる静かな笑いはすべてここに含める。つまり、自分で何か言いながら、あるいは、言った直後に自分一人でそっと笑う形である。

以下はロンドン組の例で、読み書きを習いたいかどうかを話し合っている談話の最後の部分である。

C 1 : I don't know, I think I'll just give whatever it is a go anyway.

<含み笑い> (どうかしら、まあやってみるわ。)

{D : Yeah. } (そうね。)

テープから聞こえるCの笑いには、やや自嘲するような響きがある。賛成者との間に多少のラポートを生み出すかといったところである。ロンドン組のもう1例も同様であるが、次の東京組の例には、自嘲の響きはない。

B 1 : なんか間違えたときに、「ああ違う！」とかって言っちゃうじゃない？

{A : そう}

(B) 日本語でついポンっと。

B 2 : でもそれってさあ、むこうは、なんか、あっ違うことをやってるんだなってわかってない？

{複 : ンー}

{A : わかってるー}

B 3 : この子間違え、違う、言いたいことを言葉がわからなくて言えなかつたんだっていうのが、こっちのなんかアクションとかで〈かすかな笑い声〉わかってくれるでしょう？

{複 : ンー}

{A : そうだねー}

自分で使った「アクションとか」という表現に、多少反応しただけであり、ラポートにはあまり関係ないと思われる。

2.2.5. ひそかな笑い（2）気まずさ

次はシンガポール組の例である。

plu. 1 : 〈指示の紙を読みながら〉 What kind of program do you want for studying Japanese in this training.

(今回の研修で日本語を学習するにあたってどんなプログラムを望みますか。)

{B : 〈小さな声で〉 What kind...? (どんな)

{A : 〈小さな声で〉 What kind of...? (どんな)

⟨1.0⟩

{? : 〈小さな笑い声〉 }

ここでは、一斉に話題を指示する紙を読み上げたあと、一瞬だれも発話せず沈黙がおとずれる。この沈黙を嫌ったひとりの参加者から、居心地の悪さを

示す小さな笑い声がもれる。この直後、即座に A が話しあり、以後は話し声と笑い声が絶え間なく続く。いわば、この笑い声がきっかけとなって会話が順調に流れ始める。この例も、ラポートに関しては直接的な影響を持たないと思われる。

2.2.6. 笑いとグループ間の差異

笑いは以下のように分布している。

	東京	シンガポール	ロンドン
(1) おかしさ	2	31	1
(2) 好意的	0	9	3
(3) ひそかな笑い	1	3	2
計	3	43	6

シンガポール組の場合、笑いの回数が多いだけでなく、複数の参加者あるいは全員による笑いが多いという点も注意をひく。参加者の多い笑いはラポートの維持・増強といったプラス要因となる。東京組はすべてが単数話者によるもので、ロンドン組は单複半数ずつである。どっと全員で笑う形はシンガポール組にしか見られない。笑いを話者がコントロールしているものと、コントロールしかねるものとに分けるとすれば、今回は前者が圧倒的と言える。シンガポール組の場合は、笑いがラポートの表示となるばかりでなく、あいづちともなり、ターン交替の合図の役もはたし、まさに談話構成の最大要素と言えよう。

2.3. ターン（発話権）の保持

ターンとは、同一の話者が実質的発話を継続する権利である。ターン交替回数は各10分間の談話中、以下の通りである。

東京 31回 シンガポール 91回 ロンドン 104回

この回数の中には、他の発話との重なりなどの理由で、ターンを得ずに途中放棄された実質的発話は含まない。それらの数がそう多くないことと、ターン保持時間にほとんど影響しないためである。

東京組のターン交替回数が英語座談の約3分の1ということは、裏返せば

ひとりの話者のターン保持時間が約3倍であるということになる。どんな要因で、ターン保持時間は長くなるのだろうか。主な要因として以下が考えられるのではないだろうか。

- (1) 座談の目的を意識し、各参加者がまとまった情報を提供しようとしている。
- (2) 過去の「話し合い」形態（例えば、義務教育課程でのホームルーム討議など）を各自が頭に描き、一人一人の発表を重んじる形態が設定された。
- (3) 他の参加者全員が興味を持つに足る、発表に値する内容を話し手が持っていると認識され、ストーリーテリング（語り－Polanyi1985）の形になった。
- (4) 能動的参加を好む者と受動的参加を好む者との2種類のタイプからグループがなりたつ。
- (5) 一人一人がじっくりと話す時間を得る、ゆったりペースの会話スタイルが採用された。

東京組の場合は、全員がどこかの時点で長いターンを保持している事実から(4)の可能性は除外される。(1)については、可能性が高い。また、(2)は否定はできないが、「です・ます」体がほとんど現れないと感じられたのは(3)である。さらに、このグループに関して言えば、ひとりひとりがゆとりを持ってじっくりと発話することで、ラポートが徐々に強まっていく(5)の要素が見られる。

時に、日本人の対人関係は対決型ではなく調和型であると言われる。メイナード(1987:91)は「日本人の会話の仕方はアメリカ人のそれと比較して、調和を求めた相手を“おもいやる”ものであるとよく言われる」と述べている。この座談のペースを、そのひとつの現れと見る見方も可能であろう。しかし、ここではむしろ、

発話保持時間の長さ＝思いやり＝調和,

発話保持時間の短さ＝対決

といった単純な図式は描けないことを意識したい。話し手と聞き手がめまぐるしく入れ替わる、その相互作用の多さ、ペースの早さに皆の和を見いだすこともまた可能だからである。これについては、次の項と合わせて考えてみたい。

2.4. 発話の重なり

発話の重複、つまり重なり発話の発生箇所数は、各10分間で、以下の通りである。ここでの「重なり発話」は、実質的発話の重複を意味し、あいづちと実質的発話、あるいは、あいづち同士の重なりは含まない。

東京 8回、シンガポール 26回、ロンドン 48回

東京組の特徴は重なり発話が少なく、きわめてスムーズなターン交替が行われていることである。それと比較すると、シンガポール組の重なり発話は多く、ロンドン組ではさらに多い。ラポートと重なり発話の関係は以下に分類できよう。

2.4.1. 終了前開始型（1）ターン確保消極型

話者Aが話し終わるのを待ちきれないかのように、Bがかぶせるように始める重なり発話で、以下のような形となる。

A : ----- <*> -.

B : <*> -----.

これは3座談すべてに見られた。しかも、賛意を表明し、支持・補強につながることが多い点が共通していた。ターンをとるほどの気はないのだが、心に浮かんだことを即座に言ってしまう場合が多い点も、また、共通していた。つまり、ターン確保に消極的という点ではあいづちに近いが、内容的には新たな情報を加えて実質的な発話になっており、結果としてターンを得てしまうといった形である。

以下は東京組のターン確保消極型で、Bが子どもの時の多言語学習体験について話しているところである。

A 1 : じゃあ全くこう耳から入って <*> くる。

{B : <*> そう。}

B 1 : こう、こういうのがー、いろんな国語でしゃべろうっていうやつだったんだ <**> けど。

D 1 : <**> でも、頭はちっちゃい子って柔軟だ <****> から。

{B : <****> 柔軟だからでしょーねー、そう。}

D 2 : ちっちゃい頃覚えるとねー。

Aの発話が終わりそうになると、待ちきれないようにBが反応し、次にDがすぐさま反応し、それに対して、Bが待ちきれないかのようにあいづちを打っている。ゆったりしたテンポの東京組にはめずらしい形だが、ここでは明らかに皆が話題に興味を持っている熱意の現れととれ、ラポートのプラス要因となっている。

以下はロンドン組に見られるものである。

C 1 : And then Sensei can't <0.6> hear the mistakes that we're making

{A : <*> That's right, individually...}

(C) : <*> <0.8> individually, because sometimes in a group you incline to get lost, <**> nnn...

A 1 : <**> You get lost,
<***> and (?)

D 1 : <***> Yeah, even (?) my voice has been completely lost amongst everybody else's.

(C) 1 : そうすると先生は私たちの間違いが聞き取れないわけ、

{A : そうよね、一人一人のは)

(C) : そう一人一人のは、というのはいっしょだとわからなくなってしまうから。

A 1 : わからなくなってしまって、そして(以下聞き取り不可)

D 1 : そうね、自分の声だってみんなの声に完全にまぎれてしまうんですも

の。)

AはCにindividually(一人一人の)という語を提供し、逆に、get lost(わからなくなる)をもらっている。そしてこれは次にターンを保持したDに引き継がれていく。Aがターンとりに消極的なせいか、最初の話者Cは〈*〉から発話が重なってもそう簡単には話しやめない。Aの単語を引き継いで、「共話」の形で進んでいる。語彙の重なりは、ラポート表示となり得(Tannen1989)，より強いラポートを生み出す要因となっている。

2.4.2. 終了前開始型(2) ターン確保積極型

ターンをとる目的で、Bがまだ終了の表示をしないAを中断する形も、終了前開始型の1種である。明確な意図のもと、いわば割って入る形の妨害的中断である。これはAのターン継続意志があまり強くなかった場合は、支持・補強の現れとしてプラス要因となる。逆に、ターン保持の意識が強かった場合は、マイナス要因となろう。これが東京組も英語座談もそろって1例という少なさで、しかもはじめの話者が悪感情を抱いた感じはない。

次は東京組の例であるが、箇所は2.2.1.の後者の例と重なる。

B 1 : (前略) それを〈0.5〉ドイツ人とかフランス人とかー,
 : 〈*〉あと 〈1.4〉 ンーあとなに、あのスペインとかー
{D : 〈*〉フランス人特にわかんないよねー} 〈Cに向かって小さな声で〉
{C : 〈笑い声〉}
(B) 南米〈0.6〉の方〈***〉の人とかー···

D 1 : 〈***〉私もスペインに行ったときに、英語がぜんっ
 ぜん通じなくってー、なんか、こう、バルに入ったんだけど、(後略)
Dは最初の発話はターンとりの意志はないが、次の発話は明確な意志を持つてBを中断している。しかし、内容がBを補強するものであるせいか、テープで聞いた限りBが悪感情を抱いた感じはない。

2.4.3. 同時開始型

Aの発話の終結後、BとCがたまたま同時に発話してしまう、意図せずに起こる重複で、以下の形をとる。

A : -----

B : <*> -----

C : <*> -----

発話が同一内容だった場合はラポート発生要因となることが多いと思われるが、異なる内容の場合は、むしろマイナス要因となろう。

以下はロンドン組の例である。

A 1 : <*> The tapes are an asset, aren't they? (テープは役に立つわね。)

? : <*> The tapes are (?) (テープは(以下聞き取り不可))

ここで、発話者の特定できない声はAの発話と重なって始まるが、即座に話をやめ、Aはなにごともなかったかのようにスムーズに発話を続ける。ここでは重複がプラスとなることはあっても、マイナスとはならない。

シンガポール組に見られた2.2.に引用した例では、重なり発話がラポート発生に大きく働いている。期せずして、一致して「ディズニーランド」と言ったことから一挙にラポートが強まる様子が聞きとれる。

2.4.4. 終了勘違い型

Aの音声の弱まり、音調、ポーズなどから、Aの発話が終結したと勘違いしたためBが発話を開始して、継続するAと重複してしまう状態。

A : ---, < > -----

B : -----

次はロンドンに見られた例で、Dが話し終わったと勘違いしたAが話し始めるが、Dはそのまま続けしばらく重なっている。Aはいったんあいづち的な形で最初の発話を終え、次にターンを確保する。A 1は終了勘違い、A 2はターン確保積極型となる。

D 1 : <-前略-> but I suppose it work at the end of the day,

A 1 : <*> I would imagine... yeah.

(D) : <*> but I think we should need, we need to slow down just
<**> a tiny little bit.

A 2 : <**> And also I can imagine that once we uh, we are actually in Tokyo, that will really help.

(D 1 : 一日の終わりにはうまくいくとは思うんだけど,

A 1 : <*> 私、思うんだけど・・・そうね。

(D) : <*> でも遅くする必要があると思う,
<**> もうちょっとね。

A 2 : <**> それにいったん東京へ行けば、違ってくると思うわ。

この場合重なりがラポート表示とはならないが、特にマイナス要因となるとは思えない。

2.4.5. 重なり発話とラポート

重なり発話を一覧表にすると、下記のようになる。

東京 シンガポール ロンドン

(1) 話者終了前開始型			
ターン確保消極型	4	15	26
ターン確保積極型	1	1	1
(2) 同時開始型	2	7	8
(3) 終了勘違い型	1	3	13
計	8	26	48

3座談会とも、重なり発話の場合、異なる文型・語彙を持っていても、内容的には非常に近い点が共通している。言いたいことがあって待ちきれない、はじめの話者に賛同し、支持し、補強するという感じが伝わってくる。そのため、最初の話者も不快感を抱かない。英語座談では5人ないしは6人が2グループに分かれて2人の話者がしばらくはゆずらずに話し続ける状態が、かなり見られる。3人が話し続ける場合も複数ある。しかし、そこでもターンを争うというよりも、皆で参加するという要素が強く感じられる。むしろ、ジャズなどで、異なる楽器が勝手に異なる音を出しているようにみえても、全体としてはひとつの調和をかもしだすにも似た、さまざまな組み合わせからなる柔軟性のある形態を楽しむ様子が見られるのである。米国女性のくだ

けた会話の分析でこれまで報告してきたように、重なり発話が「沈黙のない状態」「参加が継続している状態」(Duncan & Fiske 1977) ということで、一括してラポートの発生・維持・増強につながっていく様相が、ロンドン座談でもシンガポール座談でも見られるのである。

2.5. あいづち

ここでの「あいづち」は、いわゆる英語の「バックチャンネル」とほぼ同義とし、以下のように規定する。

積極的なターン交替の意志のない応答詞、感動詞、単純な繰り返し、単純な補い、単純な聞き返しを指す。笑い、非言語行動もあいづちとなるが、ここでは含めない。

2.5.1. 回数

日本語の座談にあいづちが多いことはしばしば指摘されるところである。発生箇所数では、やはり東京組が一番多い。

東京 112 シンガポール 76 ロンドン 83

ただし、シンガポール、ロンドンでは、発話の重なりが多いために、一部のあいづちを聞き落とした可能性が大きい。上の数字は聞き取れた分である。メイナード(1987)にあるあいづち回数を単純に10分間で計算した場合は、日本145、アメリカ71強となる。しかしこれは参加者二人の対話の場合であり、また、堀口(1991:36-37)に指摘されているように、尺度によって頻度に大きな違いが出てくるのも確かである。

今回の「あいづち」には、笑いや頭の動きは含まれていない。ビデオではうなずきが見え、口元も動いているように見えても、音声として聞こえないものは含めていないのである。あいづち分析には非言語行動の研究が欠かせないことを考えた時、音声だけでは全体を把握できないことは明らかである。しかし、音声だけに限っても、今回の英語の座談におけるあいづちの多さは目をひくのではないだろうか。実際、ロンドン組のテープを聞いたイギリス人男性は、そのあいづちの多さに目を見張った。米語の会話における、女性のあいづちの多さを指摘する報告はかなりある(Tannen 1990等)。そして、

堀口（1991）では、日本語でも女性の方が男性よりあいづち率が高いとする報告にも触れている。

2.5.2. 種類

以下にあいづちの種類を示す。

東京		シンガポール ロンドン		
種類数	19	種類数	17	16
ンーン類の割合	82(73%)	Yeah類の割合	41(54%)	54(65%)

LoCastro (1990 : 170) は日本語のあいづちの種類が多いことを指摘するが、今回の資料では、日英間にさほどの差はない。日本語の場合、「ンーン類」以外のものには、「ひどい、そう、ああ、へえ」といった語彙レベルも、「なんだよね、それはある」といった文レベルもある。しかし、これらは全体で4分の1強にしかならず、4回以上使われたものはない。英語の場合、まず一番多いYeah類（yeahとyes）がそれぞれ54%と65%で、日本語ほど「ンーン」類（「ン、ンー、ンーン」等）に集中してはいない。他に、4回以上使われたものとしては、シンガポールでは以下の6種類がある。

(Yeah,) that's right, (Yeah,) that's true,
Um, Hmm, Hah, Ah,

ロンドンは「Um, Hmm, No, (Yeah,) that's right」の4種類である。「女性の場合、yeahやrightよりも、うなづきとmm,hmmの使用が多い」といった報告（Hirschman1975）があることから考えても、英語では、1語への集中度がやや低いということは言えるのではないか。それから集中度が圧倒的に高いあいづちが、今回は「yeah,yes」といった単語であることに注目したい。日本語の「ンーン」は単語ではないために、かえって、だれの耳にもはっきり届く面を持つとは言えないだろうか。

2.5.3. 話者の数

さらに、あいづちで特徴的なことは、東京組の音の力強さ・長さである。語ではなく「ンーン」といった鼻音で、いわば音楽の持続低音のような響き

を持つ。これはMaynard (1986 : 1086) では、「uの鼻音化で話し手のバッタグラウンド・ミュージックのような音」と形容されている。ただ、参加者2人だけの対話では耳に達しないような弱い音で、数からは除外されもする鼻音が、今回のように複数の参加者を持つと異なってくる。あいづちを打つ人の人数が多いと、音は大きく力強く響くものである。

話者の数は以下のように分布している。

	東京	シンガポール	ロンドン
単独話者	50	66	82
複数話者	62	10	1

東京組では、決まった場所で、話者以外の全員がほぼ声を合わせて、同じ形のあいづちを発するという状況がかなり頻発する。シンガポール組にしてもロンドン組にしても、発生箇所が微妙にずれことが多い。「Yeah」と言う小さな声に重なって(あるいは続いて)「Yes」あるいは「That's right.」と小さな声が聞こえるという状況では、東京組に比べてインパクトが弱い。

ロンドン組の唯一の複数話者によるあいづちは以下の箇所である。

E 1 : I couldn't write it at all. (私、全然書けなかったわ)
 {plu. : No.} (そうね)

シンガポール組の場合は、複数話者によるYeahとAhとNoのケースと、Yeahと他のあいづちとの重なりのケースが見られた。同一の音が同時に発されることが少ないという事実が、英語のあいづちが実際よりも少なく認識されることにつながっているのではないだろうか。

2.5.4. 機能

あいづちの機能についてメイナード (1993 : 160) は以下を挙げている。

- (1) 続けてというシグナル
- (2) 内容理解を示す表現
- (3) 話し手の判断を支持する表現
- (4) 相手の意見、考え方方に賛成の意志表示をする表現
- (5) 感情を強く出す表現

(6) 情報の追加、訂正、要求などをする表現

上記の機能の多くがラポートを表示し、その維持・増強の要因となると思われる。無論マイナス要因になりそうなあいづちも考えられる。早く終わってほしい、おもしろくない、興味が持てない、わからないなどという否定的感情を伝えるものである。しかし、3つの座談中のあいづちに、聞き返すといった中立的なものはあったが、はっきり否定的と認められるものはなかった。

一方、プラス要因となるものは多くあった。なかでも補いの機能を持つものは、ラポートのプラス要因となる。まず東京組の例である。

B 1 : なんかあれしたいとか、あれしてとか、あれすればいいとかっていう、本当に <0.6> 文法 <0.4> 的に <0.2> 考えちゃうじゃない、あたしたちが <0.4> 話そうとすると…

{? : <*> シーン}

{D : アー <*> 過去形・・・}

B 2 : <*> 主語言って動詞言って <0.4>

過去形にしなきゃあとか、そういうようなのが、日本語だったらさー、考えないでも過去形、過去形とかそんな未来形とか考えたことないじゃない。

最初の発話でBは立ち止まり立ち止まり、単語を探しながら話している。そこへ、Dがさっと「過去形」をあいづちの形で差し出す。Bはそれをもらいターンを保持している。

同じようにロンドン組では以下が見られる。

D 1 : Not video, just for us to learn at home perhaps, to go along with our <*> books, and <0.6> Linguaphones.

{B : Yeah, <*> like Linguaphone tape. }

(D 1 : ビデオじゃなくて、本の内容に沿っていて、うちで勉強できるような

{B : そうね、リンガフォンのテープみたいな)

(D 1) : <0.6> そうリンガフォン。)

ここで、DはBのあいづちで出された「リンガフォン」をもらって、発話を継続している。なお、あいづちに関しては、打たれる場所とタイミングも興味深い事象であるが、またの機会にゆずりたい。

3 まとめ

3.1. 対照項目と仮説について

以下に主要対照項目の一覧を示す。

話題	東京	シンガポール	ロンドン
	豊富・個人的	具体的	一般的
笑い声発生箇所	3	43	6
ターン交替回数	31	91	104
発話の重なり箇所	8	26	48
あいづち発生箇所	112	76	83

はじめに立てた先行研究に基づく仮説について、データから得られた結果をまとめたい。

- (1) 英語座談の話題は日本語座談の話題に比べて個人的体験に踏み込むのが多く、それがラポートをより強めるという仮説は成立しなかった。むしろ、その傾向は日本語の座談に見られ、シンガポール組では、話題が個人的体験に踏み込むこととラポートとの間に強い関係があるとは見られなかった。
- (2) 日本語座談では、英語座談よりも笑い声が多く聞かれ、ラポートを表示すると共にさらに強める働きをするという仮説は、成立しなかった。今回の資料に限って言えば、シンガポール組のみで、笑い声が大きな要因となっている。
- (3) 日本語座談では英語座談よりも話者交替がひんぱんに行われ、重なりが多いとの仮説は成立しなかった。今回の資料に限って言えば、日本語座談は話者交替が少ない。発話の重なりも英語座談に比べて少ない。ただ、重なっている箇所に妨害的中断が見られないことは検証された。

つまり、参加者が「共話」の形で共同して発話を作り上げていく形にラポートが表示されることは見られたが、それは英語座談にも共通している点である。

- (4) 英語座談では、話者交替がスムーズな間隔で進み、重なりがあまり起こらないとの仮説も成立しなかった。また、シンガポール、ロンドンとも、語彙の重なりは見られても、意見の積み重ねはあまり見られなかった。
- (5) 日本語座談では英語座談よりもあいづちが多く、それが、話し手の発話継続を促すと共に、ラポートの表示ともなる点は検証された。しかし、注目すべき点は、むしろ英語座談でも同様の機能を持つあいづちが多く見られる点であろう。今回の日英のあいづちに関する異なりは、頻度や機能よりも、形の均一性と発する人の数にあるように思われる。

3.2. ラポート表示の異なり

以上見たように、3つの座談のラポート表示は、異なる部分と重なる部分を見せた。各座談でラポートを表示し、その発生・維持・増強にもっとも影響したと感じられた要素は、それぞれ異なっていた。

- 東京－個人的体験への言及
- シンガポール－笑い声
- ロンドン－重なり発話

そして、今回のラポート表示形態を決定した第一の要素は、背景知識の差に思われる。例として与えられた話題に関して、東京組は多くの体験・背景知識を持ち、逆にロンドン組にはわずかな背景しかなかったからこそ、それぞれの会話スタイルが出現したのではないか。そして断るまでもないが、上記の結果から、近い将来異なるグループの参加者が同僚として接する際、会話スタイルの違いからラポートがなかなか生まれないと予測することはできない。例えば、東京組について「長々と個人的体験を話したがる人達」、シンガポール組について「簡略な発話に終始し笑っている人達」、ロンドン組について「だれかが話しているのに口をはさむ人達」といった評価がつき

まとうとは考えられない。相手が変わり話題が変わっても、同一の会話スタイルが守られるなどということはありえないからである。しかし、それでもなお、ここで示された傾向が、異文化コミュニケーションの初期の段階での戸惑いの予測に役立つ点も多少はあるのではないかと考える。

そして、言語・文化を超えて重なった部分に、あいづちがある。さらに、表示の形態は、個人的話題・笑い声・重なり発話とさまざまでも、その背後に共通する要素が存在する。それは「サポート（支援）」という語でまとめられる要素である。母語・文化を超えて、座談が互いのサポートによって成り立つ様子が強く見られる。これは「男性はassertiveな（断定的で主張型の）話し方をし、女性はsupportiveな（支援型の）話し方をする」という多くの報告（Duncan & Fiske1977等）を裏付けるものだろうか。Maltz & Borker (1982 : 196) は米国内の異なる人種間のコミュニケーション上の困難は、異なる性、つまり、男女間のコミュニケーション上の困難にもあてはまるなどを主張し、それを「文化的差異と誤解」という大きな枠の中でとらえている。確かに、今回の資料を見る限り、異なる文化に属する3組の女性グループは、「女性」という文化において共通点を示しているように見える。しかし、今回の結果はあくまでも、若い女性による3つの座談の対照から得た限られたものであり、安易な一般化は避けたい。今後異なる種類のデータを加えて、会話スタイルとラポートとの関係がどのように変化するかを追っていきたい。

座談会の参加者の皆さん、録音・録画でお世話になった佐野ひろみ、大槌ユリ子の両先生に感謝します。また、John Phillips, Michael O'Connell, 佐野ひろみの3氏には、文字化資料に目を通してくださいました。

注

- 1) 日本語教育学会 (1990.3) 『教授活動における日本語教師の実践的能力と授業技術に関する調査研究－初年度中間報告書－』 (社) 日本語教育学会 (p.13)
- 2 談話は南 (1981:89) の定義にはほぼ沿っている。
- 3) 非言語行動の情報はほとんど加えていない。笑顔、同意の首振り、ジェスチャーの模倣などはラポート発生・維持の大きな要素となるが、今回の分析では除外した。一部ビデオ録画されていないデータがあること、録画した部分もカメラ1台で行ったのみで分析には不十分なためである。
- 4) 沈黙の時間の測り方であるが、機械的計測よりも会話のテンポを重視するザトラウスキー (1993) の方式を採用した。ただし、筆者は「あかさたな」で1秒「はまやらわ」で2秒を原則とし、各会話のテンポに従って自身で数えた。
- 5) Inadvertent (意図せずに起こる重複) と violative interruption (妨害的中断) の訳語はザトラウスキー (1993:13) による。

参考文献

- 1) Brown, Gillian & George Yule (1983) *Discourse Analysis*, Cambridge University Press.
- 2) Brown, Penelope & Stephen C. Levinson (1987) *Politeness: Some Universals in Language Use*, Cambridge University Press.
- 3) Coser, Rose L. (1960) "Laughter among Colleagues", *Psychiatry* 23 (in Barrie Thorne and Nancy Henley (eds.) *Language and Sex; Difference and Dominance*, Newburry House).
- 4) Duncan, Starkey & Donald W. Fiske (1977) *Face-to-Face Interaction: Research, Methods, and Theory*, Lawrence Erlbaum Associates, Inc.
- 5) Goffman, Erving (1976) "Replies and responses" *Language in Society* 5.3, pp. 257-313.
- 6) Hayashi, Reiko (1988) "Simultaneous Talk - From the Perspective of Floor Management of English and Japanese Speakers", *World Englishes* 7:3, Pergamon Press, pp.269-288.
- 7) Hill, B., S. Ide, S. Ikuta, A. Kawasaki & T. Ogino (1986) "Universals of linguistic politeness; Quantitative evidence from Japanese and A-

- merican English", *Journal of Pragmatics* 10, pp.347–371.
- 8) Hirschman, Lynette (1975) "Analysis of Supportive and Assertive Behavior in Conversation", Paper presented at meeting of Linguistic Society of America (in *Language and sex; Difference and Dominance* Newbury House).
 - 9) Jefferson, Gail (1984) "On the Organization of Laughter in Talk about Troubles", Atkinson, J.M. and J. Heritage (eds.) *Structures of Social Action; Studies in Conversation Analysis*, Cambridge University Press.
 - 10) Jefferson, Gail (1985) "An Exercise in the Transcription and Analysis of Laughter", van Dijk (ed.) *Handbook of Discourse Analysis, Vol. 3 Discourse and Dialogue*, Academic Press Inc., pp.25–34.
 - 11) LoCastro, Virginia (1990) *Intercultural Pragmatics: a Japanese-American case study*, Ph.D. thesis, University of Lancaster.
 - 12) Philips, Susan U., Susan Steele, & Christine Tanz (1987) *Language Gender, and Sex in Comparative Perspective*, Cambridge University Press.
 - 13) Polanyi, Livia (1985) "Conversational Storytelling", *Handbook of Discourse Analysis, Vol. 3 Discourse and Dialogue*, Academic Press Inc., pp.183–201.
 - 14) Maltz, Daniel W. & Ruth Borker (1982) "A cultural approach to male–femal miscommunication", John J. Gumperz. (ed.) *Language & Social Identity*, Cambridge University Press.
 - 15) Maynard, S.K. (1986) "On back-channel behavior in Japanese and English casual conversation", *Linguistics* 24, pp.1079–1108.
 - 16) Maynard, S.K. (1990) "Conversation management in contrast; Listener response in Japanese and American English", *Journal of Pragmatics* 14, pp.397–412.
 - 17) Singh, R. & J. K. Lele (1990) "Language, power, and cross-sex communication strategies in Hindi and Indian English revisited", *Language in Society* 19, PP.541–546
 - 18) Steele, Susan (1987) "PartIII: Introduction", *Language, Gender, and Sex in Comparative Perspective*, Cambridge University Press, pp.263–267.
 - 19) Tannen, Deborah (1984) *Conversational style; Analyzing talk among friends*, Ablex.

- 20) Tannen, Deborah (1989) *Talking voices Repetition, dialogue, and imagery in conversational discourse*, Cambridge University Press.
- 21) Tannen, Deborah (1990) *You Just Don't Understand -Women and Men in Conversation*, William Morrow and Company, Inc.
- 22) Wetzel, Patricia J. "Are 'Powerless' Communication Strategies the Japanese Norm?", Ide, Sachiko & Naomi H. McGloin (eds.) *Aspects of Japanese Women's Language*, Kuroshio Publishers, pp.117-128.
- 23) Zimmerman, Don H. & Candace West (1975) "Sex roles, interruptions and silence in conversation", *Language and Sex; Difference and Dominance*, Newburry House, pp.105-129.
- 24) ザトラウスキー・ポリー (1993) 『日本語の談話の構造分析－勧誘のストラテジーの考察－』 くろしお出版
- 25) パン F.C. (編) (1981) 『日本語の男女差』 東西手話学会
- 26) 堀口純子 (1991) 「あいづち研究の現段階と課題」 『日本語学』 第10巻 10号
- 27) 水谷信子 (1983) 「あいづちと応答」 『話しことばの表現』 築摩書房
- 28) 水谷信子 (1984) 「日本語教育と話しことばの実態－あいづちの分析－」 『金田一春彦博士古稀記念集 言語学編』 第二巻 三省堂
- 29) 水谷信子 (1988) 「あいづち論」 『日本語学』 第7巻12号 明治書院
- 30) 南不二男 (1972) 「日常会話の構造－とくにその単位について－」 『言語』 1-2 大修館書店
- 31) 南不二男 (1981) 「日常会話の話題の推移－松江テクストを資料として」 『藤原与一先生古稀記念論集 方言學論叢 I』 三省堂
- 32) 南不二男・江川清 (1987) 「談話テクストの作成」 『談話行動の諸相－座談資料の分析』 三省堂
- 33) メイナード・泉子 (1987) 「日米会話におけるあいづち表現」 『月刊言語』 16巻12号 大修館書店 pp.88-92
- 34) メイナード・泉子 (1993) 『会話分析』 くろしお出版
- 35) リーチ・ジェフリー (1987) 『語用論』 (池上嘉彦・河上誓作訳, *Principles of pragmatics by Geoffrey N. Leech* 紀伊國屋書店)
- 36) レビンソン・スティーブン (1990) 『英語語用論』 (安井稔・奥田夏子訳 *Pragmatics by Stephen C. Levinson* 研究社)